

■ 図 書 紹 介 ■

梶 哲夫先生・横山十四男先生退官記念出版会編
『社会科教育四十年—課題と展望』 (明治図書, 1989年)

二 谷 貞 夫

1987年12月24日の教育課程審議会答申に従って、1989年3月15日に新学習指導要領が告示された。今世紀最後の教育課程と考えられる今回の改訂では、高等学校から教科名社会科が消え、小学校低学年においても理科とともに社会科が廃止された。1945年8月15日の敗戦を境として、戦前の皇国民錬成・軍国主義の教育と訣別し、日本国憲法・教育基本法のもとで、主権在民の平和・民主主義の教育が行われるようになり、その中核的教科として社会科が大きな役割を果たしてきた。その社会科が新学習指導要領では、「入口」と「出口」で「解体」して終わったのである。

このことを銘記しつつ、これまで一貫して社会科教育の発展に尽力されて来られた梶 哲夫先生・横山十四男先生が筑波大学を1989年3月に退官されるにあたり、本書が両先生にゆかりの深い人々によって上梓されたことの意義を社会科再生への道として求めてやまない。

本書の書名が社会科教育四十年—課題と展望とあることの意味を噛み締めながら、本書の紹介を行い書評にかえたい。

本書の構成は、次のようになっている。

- I 社会科教育の成立と発展
- II 社会科教育と学問
- III 社会科教育40年—何が問題にされたか—
- IV 社会科教育40年—どう実践されたか—
〔小学校における社会科実践〕
〔中学校における社会科実践〕
〔高等学校における社会科実践〕
- V 直面する課題に立ち向かう社会科
- VI 国際化時代における社会科教育の使命

以上6章の内容は、33節にわたるが、梶・横山両先生を含め33人の執筆者がそれぞれのテーマに対して鋭く迫っている。

巻頭論文において、梶先生は、社会科の解体に対して、「社会科の原点、大切にしてきたことを確認し、これらを生かす努力を継続すること」と「社会科40年の成果を基礎として、総合的な社会認識の形成を一層追求し、その実現を目指すこと」を上げておられる。これは、まさに本書を貫く基調である。予想される急激な社会の変化に対して、人間として冷静・沈着な、そして果敢な決断を求められる時、総合的な社会認識は不可欠のものである。ますます必要となる総合的な社会認識の基礎・基本は社会科教育40年の歴史が築いてきたのである。その内容として、社会科地理教育、社会科歴史教育、社会科公民教育のそれぞれの展開と課題について朝倉・横山・梶3先生が自らの教育実践と研究者としての理論化を通じて、切々と論述されているのが第1章である。第2章では、社会科教育の内容とかかわる諸学問について、谷川・篠原・横山・高山4氏が論述している。特に谷川氏の酒井忠雄の所論から論じた教育研究の核としての「教材研究」への論及は、社会科における学問と教育の関連を認識する上で貴重な提言といえよう。第3章では、市川・大森・影山3氏が、社会科教科論を40年の歴史を踏まえて、本質・カリキュラム・指導法からそれぞれ迫っている。市川氏の指摘する“青少年の現実生活の切実な問題”への主体的な取り組みとしての社会科論は、たしかに、「再び時の勢いにあざむかれぬ人間」の育成という戦後教育の原点を見つめる重要なポイントである。第4章では、社会科教育40年の教育実践の遺産を跡づける論述であるが、小学校、中学校、高校と校種別にキー・ワードを配して、総合的な社会認識の形成を視座に見据えながら、諸々の社会科教育実践を分析している。第5章では、「人類の課題と世界史」「国際化社会における社会科の課題」「議会議民主主義と社会科」「平和・自由の主体形成と“日本文化”」「環境問題と社会科」「経済社会の成熟化と社会科」「米国民の形成と人権を中核とする社会科教育」をテーマとして、現代の課題を見据えての社会科教育の目標・内容・方法をそれぞれの執筆者が論じている。第2節は森茂氏による副題に「人類益」の追求にむけてを付した論説だが、社会科の目標構造を「人類益の課題＝人類の追求、社会科の人間像＝世界市民の育成」「社会科の目標＝①同時代意識②地球感覚③異文化理解④以上の3点を身につけて地域で行動する能力」と提起している。第6章では、アメリカ、西ドイツ、イギリスの社会科が人類の課題にどう対応しようとしているかを、江口、大友、宮園3氏がそれぞれを論じている。江口氏は、この論攷で、“国際化時代の社会科の使命は、異質性を排除することではなく、生かすことである”と提起し、アメリカ社会科の歴史と現状からの学ぶべき点を指摘している。紹介に紙幅を費やしてしまい、それとても十分でないのは、筆者の非力によるもので、ご容赦いただきたい。蛇足だが、本書を一つの跳躍台として本学会の質量がさらに飛躍することが梶・横山両先生への最大の贈り物となろう。本書に拙文を書いた著者の自戒をこめての檄である。

(上越教育大学)